ろくでなしの救世主

ダルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ろくでなしの救世主

【Ｎコード】
Ｎ６７９９Ｙ

【作者名】
ダルマ

【あらすじ】
王立魔法学院に入学した少年の話。

1

今日の王都はいつも以上に賑やかになっていた。街は装飾に彩られ、窓から放たれる鮮やかな紙吹雪が空を舞い、露店が軒を連ね、多くの人が往来している。

王立オデュッセル魔法学院の入学式は街を上げてのパレードによってまるでお祭りのような騒ぎになっていた。それもそのはず、魔法学院とはその名の通り魔法士を育てる教育機関で、王国の中でも魔法学院と呼ばれるものは、王都にあるオデュッセル、西都にあるアイリス、東都にあるグリダナの三つしかない。

魔法士とは魔法を使う者の名であり、その力は絶大で、王国の軍事力をはじめ、様々な分野の中枢を担っている。それだけに、魔法士育成は国策として教育に組み込まれており、その魔法学院の新入生はいわば金の卵達であり、国民からは尊敬と期待の目で見られる。

そんな中を、学院の制服に身を包んだ一組の男女が歩いていた。胸に着けたエンブレムの紋様から、新入生だということが分かる。きらびやかな光景に目を奪われながら、亜麻色の髪をした少年が言った。

「すごいな。まるでお祭りだ」

少年の目には、大道芸人や楽隊、仮装集団など様々なものが映る。そのどれもが新鮮で刺激的だった。

するとその隣を歩く栗色の髪をした少女が言う。

「ウィル、あんまりウロウロしてたら迷子になるよ」
ウィルと言われた少年はそれに溜息を溢す。
「子供扱いするなよ、アーネ」
「何言ってるの、ウィルはまだ子供でしょ」
アーネと呼ばれた少女はそう言ってウィルを見る。肩を並べるとより分かるが、アーネの方がウィルよりも背が高い。これはウィルの背が普通より低いのが原因だったが、アーネの大人びた顔立ちも相まって、並んで歩くとまるで姉弟のようだった。
二人は同じ孤児院で育った、幼馴染だった。年は変わらないが、いじめられっ子だったウィルをアーネが助けたことがきっかけで仲良くなり、現在では本当の姉弟のような関係になっていた。
「ほら、ネクタイ曲がってる」
アーネはそう言ってウィルのネクタイに手を伸ばす。
それをウィルは身体を反らして避けようとする。
「や、やめろよっ、恥ずかしい！」
「入学式でネクタイ曲げてる方がよっぽど恥ずかしいでしょ。ほら、じっとして」
幼馴染としての経験により、抵抗は無駄だと悟ったウィルは、まるで人形のように身を固まらせ、アーネにされるがままの状態になる。
往来の人々の視線を感じ赤面すると同時に、いつもと違う制服姿の

幼馴染が目の前に迫り、ウィルは少しだけ緊張していた。

「よし、これでオッケー！」

アーネの声を聞いてやっとウィルの肩の力が抜けた。
視線を胸元に落とすと、ネクタイはしっかりと整えられていた。

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして！　ねえ、入学式までまだ時間があるし、ちょっと観光しない？」

ウィルが時計台を見上げると、確かに入学式の集合時間までまだ十分な時間が余っている。わざわざ早めに学院に行って楽しみを無碍にするのも何である。いや、むしろ新入生がある程度観光を楽しめるように時間が設けられていたと考えるのが自然だろう。実際ウィル自身もこの祭りの雰囲気にのまれてうずうずしていた。

「そうだね、せっかくだし楽しもうか！」

ウィルの言葉にアーネは頷く。
そして笑顔の二人は、騒がしい人々の流れの中に混じっていった。

◇◇◇◇

街のいたる所で人だかりが出来ており、一方では王国の国父、英雄王の叙事詩を綺麗な声と動きで伝える吟遊詩人や、一方では口から火を噴き剣を飲み込む大道芸人など、様々なものが人々の興味を引いていた。

そして両脇に露店が軒を連ねる街で最も広い一本道では、ホットドッグやリンゴ飴などの軽食を売る屋台、景品の懸けられた遊戯を提供する店など、様々なものがあった。

その中の一つ、甘くいい匂いのする露店に二人は立ち寄った。
露店には黄金色に焼けたパンが並べられ、それを見た二人は声を上げる。

「わあ～！　おいしそう！」

「確かにうまそうだ……」

二人が腹の虫を鳴らしていると、店主のお姉さんが言った。

「あなた達、その格好は新入生ね？」

「え？　は、はい」

「それじゃこれはサービスよ！　入学式の前に小腹を満たしときなさい！」

そう言ってパン屋のお姉さんは店のパンを袋に入れて渡した。
それに驚いたアーネは言った。

「え、いいんですか？」

「もちろん、新入生にはみんなタダよ」

お姉さんは笑いながらサラっと言う。

そんな彼女にウィルは言った。

「なんだか悪いなぁ……」

「ああ、気にしないで。ウチだけじゃなくて露店やってる人らは大体みんな新入生にはサービスしてるから。みんなあなた達に期待してるのよ。まあ、聞こえは悪いけど投資ってやつ？　将来、有名になった魔法士が自分のお店に通ってたとなったらそのお店は大繁盛でしょ。だからみんな自分がやってるお店の名前を覚えて貰おうと必死なの」

なるほど、とウィルは納得する。

するとアーネが気付いたように言った。

「ということは、お姉さんもお店をやってるの？」

「うん。『サンタニコ』ってカフェやってるから、よかったら覚えといてね」

お姉さんはニッコリと笑う。

それを見てアーネとウィルの二人は言った。

「ぜ、絶対行きます！」

「お、俺も！」

「ふふ、期待しないで待ってるわ」
彼女は優しい目で二人を見ながらそう言った。
アーネとウィルはお礼を言って露店を離れた。

◇◇◇◇

再び人々の混雑する中に戻った二人。
歩きながら、ウィルは貰ったパンを袋から出しさっそく一口食べた。

「！　う、うまい！」

あまりのおいしさに思わず声を上げるウィル。
それを聞いた隣のアーネがウィルを見る。

「おおげさよウィル」

「いいからアーネも食べてみろよ！　すごいうまいから！」

言われて、アーネもパンを一口、口に運ぶ。
するとアーネも、思わず口元を綻ばせる。

「ほんとだ、おいしい」

「だろ？」

「表面はパリッとしてるのに生地はもちもちしてて、それに甘さ控えめのカスタードクリームが絶妙にマッチしてる……シンプルで無駄のないおいしさって感じ」

アーネの言葉にウィルは大きく頷く。
それは二人が今まで食べたパンの常識が軽く覆るほど、衝撃的な味覚体験だった。

「確かサンタニコって言ったよな。しまった、場所聞くの忘れてた」

悔しそうにパンをもう一口、口に運ぶウィル。
すると、アーネがパンの袋の中に一枚の紙が入っているのに気付いた。

「なにこれ……？」

紙を取り出し、アーネとウィルはそこに書かれたことに目を落とす。
そこにはカフェ・サンタニコの住所が手書きの地図とかわいらしいイラスト付きで記されていた。恐らく、パンを渡す時にあのお姉さんが袋の中に忍ばしておいたのだろう。
二人は顔を見合わせ、思わず笑った。

「商売上手ね」

「うん。これじゃ行かない訳にはいかないよ」

◇◇◇◇

後で必ずサンタニコに行こうと二人が決めたその時だった。
道の先から何やら騒がしい声が聞こえる。
何事かと二人が前方に目をやると、上空に一つの陰が見えた。

「なんだ？」

ウィルは最初、鳶か何かと思ったが、それにしてはあまりに大きい。
それは何か紙のようなものをばら撒きながら、建物の上空をスレスレで飛行していた。

「またあいつらだ！」

同じく空を見上げていた人々の中からそんな声が上がった。
それは翼で風を受けながら滑空すると、ウィル達の真上までやってきた。

それは竜だった。
蜥蜴を連想させる頭部と蝙蝠のような翼をいっぱいに広げ、空を駆ける。
しかし、その体躯は竜にしては小さい。全長はおよそ２ｍ程しかない。

そしてウィルが驚いたのは、その竜の上に人が乗っていたことだ。
ゴーグルを装着し手綱を引くその青年は、ビラを上空からばら撒きながら叫んだ。

「飛行クラブをよろしくお願いしまーす！」

そう言って竜と青年はウィル達の頭上を通り過ぎ、あっという間に向こうへ飛んで行き、小さい陰となってしまった。

突然の出来事に人々が騒然となる中、ウィルは空からヒラヒラと落ちてきたビラを拾い上げると、アーネと一緒にそこに書かれたものに目を落とした。

「なんだこりゃ？」

「飛行クラブ……？」

そこには人間が竜に乗っているイラストと共にデカデカとこう書かれていた。

『新入生大歓迎！
君も飛行クラブに入ってワイバーンと一緒に空を駆けよう！』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6799y/

ろくでなしの救世主

2011年11月20日18時38分発行